

- 1 課題名 養殖衛生管理体制整備事業（海面）
- 2 区分 国交付金（国費：県費＝1：1）
- 3 期間 平成15～20年度
- 4 担当 養殖栽培部（堅田昌英）
- 5 目的 養殖魚介類の防疫指導を適切に行うことで疾病のまん延防止を図り、安心・安全な生産・供給体制を確立する。

6 成果の要約

養殖場の巡回指導 県内を北部（湯浅湾・由良湾）、中部（田辺湾）、南部（串本浅海漁場・大島・須江養殖漁場）および東部（勝浦湾・浦神湾）の4海域に分け、毎月1回ずつ防疫パトロールを実施した。

水産用医薬品残留検査 マダイ養殖における水産用医薬品適正使用指導に資するため、平成19年7月10日・11日に田辺湾（魚体重1.5kg）および串本浅海漁場（魚体重2.0kg）から5尾ずつサンプリングし、筋肉中の塩酸オキシテトラサイクリンの残留検査を行ったが、いずれも検出されなかった。

魚病検査

- 1) 持ち込み病魚の検査 検査件数は16魚種73件であった。

魚種別ではマダイが25件で最も多く、次いでヒラメ11件、イシダイ9件、マサバ6件で、これら4魚種で全体の約70%を占めている。月別に見ると、毎月7～23件の検査を行った6～10月の高水温期に多かった。

- 2) 魚種別魚病発生状況 マダイではイリドウイルス病が8～11月にかけて、単独およびエドワジエラ症、エピテリオシスチス症や寄生虫病との合併症で14件発生した。細菌病は単独と寄生虫病との合併症で10件見られ、そのうち、エピテリオシスチス症4件、滑走細菌症3件、エドワジエラ症2件、ビブリオ病1件であった。寄生虫病は発生件数17件で、ビバギナ、ラメロディスカス、トリコジナ、クビナガ鉤頭虫、ベネデニアおよびネオベネデニアの寄生が見られ、近年多様化していると言える。

ヒラメではイリドウイルス病が8～10月にかけて単独および合併症で5件発生した。細菌病は単独および合併症でエドワジエラ症が8件、連鎖球菌症が3件発生した。寄生虫病はトリコジナ症が8月に1件発生した。

イシダイではイリドウイルス病が7～9月にかけて単独および合併症で6件発生し、多くの被害を出した。また、ウイルス性神経壊死症（VNN）が7月に1件発生した。細菌病は6～9月にかけて連鎖球菌症が4件、ビブリオ病が1件見られた。

マサバでは5～9月にかけて連鎖球菌症が単独およびイリドウイルス病やビブリオ病との合併症で6件見られ、多大な被害を及ぼした。

ブリでは10月に類結節症がイリドウイルス病およびビブリオ病との合併症でそれぞれ1件ずつ発生した他、8月にノカルジア症とヘテラキシネの合併症が1件発生した。

トラフグでは9月および10月にイリドウイルス病が1件ずつ発生した。また、7月には滑走細菌症が1件見られた。

シマアジではイリドウイルス病が9月に1件、VNNが12月に1件発生した。また、10月には連鎖球菌症が1件見られた。

マアジ、イシガキダイ、イサキおよびクロマグロではイリドウイルス病が単独および合併症で発生した。7月にイシガキダイでVNNが見られたが、これは本疾病が発生したイシダイ養殖場の近くで飼育されていたものであった。9月に見られたクロマグロの環境障害は、台風通過後の泥水の流入によるものであった。また、中間育成中のクエで10月にVNNが1件発生した他、クロアワビで9月にビブリオ病が発生し、中間育成中の稚貝に多くの被害を出した。

- 3) 健康診断 診断件数は7魚種37件であった。このうち、イリドウイルス病不活化ワクチン接種に関係した健康診断は2魚種2件であった。

魚種別に見ると、マダイが中間魚と稚魚を合わせて23件で最も多く、他の魚種は3件以下であった。マダイ稚魚ではエピテリオシスチス、ビバギナ、ラメロディスカスおよびトリコジナの寄生が確認され、中間魚ではこれらの他に、クビナガ鉤頭虫の寄生が見られた。また、2月および3月にPCRでシマアジ産卵親魚卵巣中のベータノダウイルス保有検査を実施したところ、3件の陽性が見られた。

7 成果の取り扱い

- (1) 成果の普及
 - ・防疫パトロール
- (2) 成果の発表

平成19年度瀬戸内海・四国ブロック魚病検討会

平成19年度県内養殖衛生対策会議